

清水一行

敵対的買収

角川文庫



てき たい てき ばい しゆう
敵対的買収

しみ ずいつこう
清水一行



角川文庫 10041

平成八年六月二十五日 初版発行

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)三三三八—八四五二

営業部(〇三)三三三八—八五二二

千〇二 振替〇〇二二〇—九—一九五二〇八

印刷所——暁印刷 製本所——千曲堂

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

敵対的買収

清水一行



角川文庫 10041

目次

第一章	ある日突然	五
第二章	判官びいき	四
第三章	主役の登場	二〇
第四章	拳銃とオルゴール	二九
第五章	トラブル好き	三四五
第六章	さまよえる船	三〇〇
解説	宗 肖之介	三五二

第一章 ある日突然

1

「どうせ北池きたいけは、このところずっとホテルの一人住まいなんだろう。だから酒よりめしにした方がいいんじゃないのか」

浦川阿沙子うらかわあさこと三人で、しばらくぶりに会おうじゃないかと谷口昌之たにぐちまさゆきから電話があつて、それなら一杯やろうという北池隆史たかしの言葉を谷口が押し返して、静かな所だからと一方的に白山はくさんの普茶料理店ふちやを指定した。

巣鴨すがもから歩いて十二、三分だからと、谷口が重ねて言った。

「どうして普茶料理なんだ」

「おれの知っている店さ」

「それに巣鴨なんて……」

「それはたしかに銀座へは遠いけど、ま、いいじゃないか」

谷口が笑った。

高校から大学を通して、七年間も一緒だった谷口の言う通りだった。

隆史はこの四年ほど大手町のホテルで一人暮らしをつづけている。といつても形としてはいわゆる単身赴任……であり、いずれは適当なマンションを借りようと思つていゝうちに、実はマンションを借りて暮らすようになる、掃除洗濯に台所のことまで、なにもかも自分でやらなければならなくなる。

それがいかにもうつつとしく、ぐずぐずしているうちに長野県下諏訪町しもすわの協和精工本社きやうわを、思いきつて東京へ移そうという長年の懸案が正式に決定した。

正式決定といつても、一、二年のうちにといいことであつた。

そうなれば現在岡谷市おかやにいる妻と長女も上京してきて、東京で一緒に暮らすことになるのだからと、それでさらにホテル暮らしが長引いてしまつていゝものである。

隆史のホテル暮らしに限つたことではないのだろうが、三十五歳を過ぎた男が一人で都会のど真ん中で生活していると、どうしても夜の時間を持て余してしまふ。格別なことを期待するといふのではなかったが、日が暮れると一緒にグラスをかたむける仲間がやたらに欲しくなつた。

そうはいつても同じ年配の友人たちは、それぞれ家庭を持つていたし、いつもいい顔をして付き合つてはくれなかつた。

だが今夜は谷口とおしゃべりができる――

その上旧姓浦川阿沙子、いまは結婚して田宮姓たみやになつていゝことだったが、死ん

だ親友の妹と再会することになるのだったから、食事の後で果たして三人で飲みに行けるのかどうか、その点はわからなかったが、それでも気持ちは浮き立っていた。

隆史としては、阿沙子とは久しぶりの再会のはず……だったが、実はそうではなかったらしいのである。

そしてそのことが改めて三人で会おうという、谷口の誘いに結びついていった。

白山バイパスからちよっと路地を入ったその店は、一見ありきたりなしもた屋風で、店の看板も控え目だったから、隆史は一度通り過ぎ、すこし行ってから引き返したくらいだった。しかし沈^{じん}丁^{ちやう}花^けの匂^{にお}うくぐりを入り、案内を求めて格子戸の中へ踏みこむと、素朴で落ち着いた造りの、いかにも精進料理をすすめる店といった、年代を経た雰囲気を感じられた。

建物が古いせいで、それだけ歳月をかけて磨きこんだ黒光りのする廊下は、一足ごとに低い軋^{きし}みが立った。

しかし格別不愉快な感じではない。

「時間通りだな」

膝^{ひざ}を突いて障子を開けた店の者の背後から座敷をのぞいた隆史に、先に着いていた小太りで丸顔、眼鏡をかけた谷口が皮肉っぽく言った。

「そうさ。いまじゃれっきとした堅気のビジネスマンだからな」

顎^{あご}を突き出して言う。

「マスコミ勤めは堅気じゃないって言うのか」

「やくざですよ。それも反省ということのない、どうしようもないやくざ商売。おれは早く足を洗って、いまにして活字の世界の救いのなさを、改めて痛感しているよ」

「逃げ出した者の言い訳さ」

「いや真実だよ」

「一度滲しみみた垢あかは簡単に洗い流せるもんか」

谷口は隆史のむきな言葉に笑いながら、十畳ほどの座敷で経机きようづくえに似た狭いテーブルに向かい合っていた阿沙子の、透けるような色白な顔を見上げた。

「北池さん……」

下瞼したまぶたをちよっぴり紅潮させて、染みる爽さわやかな目許に微笑を漂わせた阿沙子が、隆史に軽く頭を下げる。

「どうも……ネ」

「ええ」

しみじみと見つめる隆史の視線に、阿沙子がちよつと眼を落とした。

「ぼくは気がつかなかったなァ。あのパーティーは参会者が五百人ぐらいいたからね。混んでいただろう。でも本当にそうだったの？」

「なにか召し上がりますかって、わたしちゃんと声もかけたわよ」

「食い物はいらんと言ったわけだな」

谷口が阿沙子と隆史を見較べて言葉をはさんだ。

「もっと丁寧だったけど」

「なんて言ったのかな」

「いま飲んでいますからって。水割りのグラスをこっちへ突き出してみせながら、でも恐い顔だったわ」

肩をすくめるようにして、阿沙子が白い歯をこぼした。

どちらかという受け口で、鼻筋の通った瓜実顔^{うりざね}。そういう阿沙子の微笑を特に美しく感じさせるのは、一重瞼の切れ長な目許の爽やかさと、粒を選んだように綺麗^{きれい}に揃^{そろ}った光沢のある白い歯であった。

口紅を薄く引いている。

こんな美人だったのだろうか？……

首をひねって、隆史は改めて阿沙子を見返して胸でつぶやいた。

本当は、本当はというよりも隆史の記憶のなかにある阿沙子は、のびのびとした長い脚の美しい少女……という印象。

それは都心のホテルで開かれたハイテク関係の、業界団体パーティーだった。そこでコンパニオンの一人として、参会者の接待をしていた阿沙子に出会っていたながら、隆史はまったく気がつかなかったのだそうである。阿沙子に気付かなかったのは、彼女がすでに隆史の記憶のなかの少女……ではなくなくなっていたことと、白いブラウスに黒のロングスカ―

トをはいていたからかもしれない。

阿沙子の美しい脚を、はつきりと確かめることができなかったから――

谷口を通して言われたとき、隆史はだからわからなかったのだと思った。

とはいっても、血液の癌がんとまで恐れられている再生不能白血病で、大学を卒業してからとうとう一度も就職せずに、親友の浦川良久よしひさが死んでからすでに十二年が経っていた。

それまでは浦川の笹塚ささづかの家で、隆史は阿沙子ともよく顔を合わせていたが、阿沙子はやっとなと高校一年生。

美人という認識を抱くまでには、まだ年齢が達していなかった。

しかし目の前の、二十八歳……になっているはずの成熟しきった女の美しさは、狭い座敷で向かい合い額を突きあわせていると、息苦しい圧迫感に似た、有無をいわさぬ凄みすごのようなものが染み出ているようだった。

微かすかに香水が匂ったが、それほど甘い感じのものではない。

結婚してやっとな一年半だという、そういう事情も阿沙子の輝くような肌の美しさに、無関係ではないのかもしれない。

木綿の作務衣さむえをつけた、坊主頭の主人が座敷ざしきへ挨拶あいさつにきた。

「精進料理と申しましたが、食を行とする永平寺えいへいじのものと違いまして、普茶料理は中国式の精進料理。食を愉たのしむ料理ですので、どうぞゆっくりご賞味ください」

隆史と阿沙子への短い説明の合い間に、店の主人は三人のグラスにビールの酌をした。

「仕事……では酒もビールもいいんでしょう」

「特に禁じられてはいないの」

念を押した隆史が、谷口と阿沙子に軽くグラスを合わせ、浮いていた泡を一息で飲み干した。

やがて料理が運びこまれ、狭いテーブルに並ぶ。

「昭和五十七年の秋？……。結婚したの？」

挨拶をして座敷を下がる店の主人を見送り、隆史は改めて阿沙子の艶つやのある白い顔をのぞきこんだ。

「おれも知らなかったんだよ。阿沙ちゃんから電話をもらって、北池と偶然パーティー会場で会ったけど、十二年ぶりなのでとても懐かしくなったから、ゆっくり話がしたいってね。そのとき一昨年の秋に結婚したと、初めて教えてもらったのさ」

親友の浦川が生きていた頃の遠慮のない言い方で、谷口が阿沙ちゃん……と呼ぶ。

「おじさんやおばさんは？」

「ええ。両親はいまも笹塚の家で暮らしている。父は去年で役所を定年になったんだけど、二年ほど嘱託で働けるからって、毎日でかけているの」

「そう……。浦川のご両親にも本当にお会いしていないな」

「北池が一番頻繁ひんぱんに通っていたからな」

「うん。浦川のお母さんの手料理がおいしかった。こっちは高校生のときからずっと諏訪

の親元を出ていたから、家庭料理に飢えていたんだ」

「いまだってそれは同じだろう」

「まったく」

隆史は素直にうなずいて、丸い盆の中から竹を細目に削った箸^{はし}を取った。

「母の手料理だけだったのかしら？」

谷口からビールの酌を受けて、阿沙子はいたずらっぽい横眼で、骨張った隆史の色黒な顔をのぞきこむ。

首の太いがっしりとした顔立ちは、昔からのものである。

「え?……」

「じゃわたしの思い過ぎだったのかしらね」

挑発するような言い方である。

「なんのこと」

隆史は箸を止めて聞き返した。

「別に、いいわ」

「言いなさいよ。言いかけたことを途中でやめられると、後まで気になってしかたのないものだからな」

「でも言いつらいわよ。もういいの」

ちよっと頬^{ほお}を染めた阿沙子は小さく首を振り、泡の盛り上がったグラスに口をつけた。

パーティーのコンパニオンをしているからなのかどうか、アルコールをさして気にするでもなく、気軽にビールを飲んでいた。

そのコンパニオンはいつからなのか。結婚してもなお仕事を続けているのは、特に事情があつてなのか、あるいは単なるアルバイトとしてなのかどうか、いくつかのことを聞いてみたい気がしたが、隆史はちょっと自分を押さえた。阿沙子にとって、ひょっとして答えづらいことだったりしたら困るなと思つたからである。

女性の新しい職業のひとつである、コンパニオンへの偏見はなにもなかったが、ただ当事者としてはそれも言葉の響きで、変わってくるかもしれない。事

「それじゃおれが言おうか」

味噌に柚子の香りをとじこめ、歳月をかけて練り固めたものをスライスした普茶料理。独特の前菜を前歯で噛みながら、こんどは隆史が阿沙子を逆に揶揄するように言った。

「え、だって……。北池さん知っているの」

膝を崩していた阿沙子が、わずかに首をかしげて聞き返す。

「知っているつもりだけど」

「あら……」

「阿沙ちゃんの兄さんにおれ、浦川に言われたことがあるからな」

「兄は北池さんにも言っていたのね」

「さりげなくだけど」

こんどは隆史が照れ隠しのようになり、大袈裟おおげさにビールのグラスを干す。

「そうだったの……」

「おい。三人で食事をしているときに、そのなかの二人にしか通じないような、そんな独りよがりな会話はやめろよ」

谷口が唇をとがらせた。とたんだった。いたずらを告白するような感じで、阿沙子が首をすくめて言葉を投げる。

「兄がね、おまえは大きくなったら北池さんと結婚しろって、でも北池さんにもそのことを話していたとは思わなかったわ」

「なに、浦川が阿沙ちゃんにそう言っていたの？」

「ええ」

「どうして」

谷口がからむように聞き返す。

「なにが？」

「浦川のやつ、阿沙ちゃんにぼくと結婚しろとは言わなかったわけだね」

「あら谷口さんと……」

一瞬言葉を飲み、阿沙子は口元を押さえて笑いをこらえるように、筋肉質で長身の隆史とは対照的に、背が低く太っていて色の白い丸顔の谷口から視線をそらした。

「おれだって浦川の親友だったんだ。そうじゃないか」

谷口がおどけてつづける。

「兄の親友だからって、そういうことではないと思うけど」

「いやそうさ。親友だったからこそこの不器用で哀れな北池のところへだよ、お嫁に行つてやれだなんて……。浦川の奴、北池に情けをかけたに違いないんだ」

「おれがどうして哀れなんだ」

「気の毒だと思ったんだよきつと」

「おい」

「だって長野県の生まれだからな。田舎者さ」

谷口の言い方で、首をひねって聞き返した隆史は、阿沙子と目を合わせて笑いだした。

「おれも阿沙ちゃんも、ひどくなめられたものだ」

「なめてなんかいないさ。昔から長野県の出身者というのは、理屈っぽく見せかけて本当は悪人ばかりなんだ。北池なんかと結婚しなくてよかったんだよ阿沙ちゃん」

「しかし浦川が阿沙ちゃんに、大きくなったらデブの谷口と結婚しろって言っていたら、阿沙ちゃんは困っちゃっただろうね」

脂肪体質で風船のように丸い顔をした谷口から、隆史はわざとらしく顔をそむけた。

「それよりも……」

おかしいな雰囲気になりかけたとき、阿沙子は首をねじって隆史を見上げた。

「え？」